

更生施設しのばず荘 保護施設通所事業 (定員: 通所 30人・訪問 10人) [平成 28 年度事業報告]

1 事業総括

本年度より指定管理が事業団へと変更した当施設では、支援の継続性に配慮しながら事業基盤確立に力を尽くした。年度当初は十分な時間を割き新旧法人職員間で異なる認識の解消や情報の共有化を図った。その上で、安否確認の強化・グレード感のある行事の企画及び運営・裏庭花壇の有効活用・社会復帰促進事業利用促進 (平成 27 年度 5 人→12 人)・ニーズに応じた利用延長 (平成 27 年度 0 人→6 人)・福祉事務所説明会での事業 PR 実施など、運営面で新しい取組みに着手した。

一方で、年間を通して定員充足が図れなかったことは今後の課題である。新規開始者は通所 27 人、訪問 3 人と少なくなかったが、従来 1 年間で利用終了としていた為、必要に応じての延長利用ができにくかったことも要因と考えられる。地域での生活安定を図ることは施設支援に比べ時間を要する為、本事業の内容を更に充実させると共に有用性を PR していくことを次年度の目標とした。

	定員		28年度実績							27年度実績			
			新規開始数 (対定員利用率)							新規開始数 (対定員利用率)			
通所	30人		27人 (90.0%)							29人 (96.7%)			
訪問	10人		3人 (30.0%)							5人 (50.0%)			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	月平均
通所	24	26	26	23	26	22	22	23	23	23	24	28	24.2
訪問	3	2	2	1	1	1	2	2	2	2	2	2	1.8

2 主要目標に対する成果

(1) 通所・訪問事業による居宅での地域生活安定に向けた支援

通所事業終了後の地域生活安定を視野に入れ、細やかな支援を行った。

(2) 更生施設機能を活用したサービスの提供

食事サービスの利用拡大、栄養士による食育行事、看護師による健康相談、職業相談員による就労支援、その他更生指導員と連携した生活相談、行事参加を通してサービスの充実を図った。

(3) 支援プログラムの充実と地域社会資源等との交流促進

自立支援マニュアル、知的障がい者支援プログラムの活用、各種障がい者向け作業所・医療機関 (デイ含む) 等との連携強化、親族他関係者を含めたカンファレンスの実施等を行った。

(4) 所内作業、中間的就労の促進

所内作業の場を確保することが難しい現状ではあるが、創意工夫により、しのばず荘ならではの作業と中間的就労の場の提供を目指して準備中である。

3 運営管理

- ・安否確認の強化により利用者の異変を早期に把握。地域生活における危機回避のため、緊張感を保ちながら適切・適宜の介入を行った。
- ・行事参加を通して依存症を抱えた方の体調変化をとらえ、更生施設専門職の関わりも得て、医療・福祉・家族を含めたカンファレンスを調整し、本人の安定と関係者間での情報共有を図った。
- ・知的障がいのある方への危機介入では、丁寧な聞き取りで主訴を引き出し、状況整理を行った。通所担当職員が不在の中、支援情報の共有化により、タイムリーな対応ができた。
- ・糖尿病の利用者に対し、食事チェック表を用いた栄養面談を毎週実施。血糖値などに改善がみられ、通院先での血液検査結果を嬉しげに持参されたり、紹介した料理を実際に調理しているといった報告を聞くことができた。
- ・限られた予算の中で、グレード感やクオリティ感のある行事の企画運営に努め、利用者満足度を高めることができた。(クリスマス会での引きこりゲーム、隅田川クルーズ、ミュージカル鑑賞)
- ・園芸倶楽部を立ち上げ、雑草で荒廃していた裏庭花壇を整備した。敷石修復作業では利用者が培ってきた土木技術を発揮してもらうこともできた。計画段階からの参加を勧め、利用者が主体的に参加できるよう工夫した。
- ・園芸倶楽部で育てた植物を使って、クオリティ感のある小物作りを行い、文化的地域の特性を活かした、しのばず荘ブランドの立ち上げを構想中である。
- ・定例 (月 1 回) の茶話会で、映像を利用して園芸倶楽部の構想を共有化し、計画段階から主体的に参加できるよう工夫した。
- ・CW向けの施設説明会では画像を取り入れた資料を用い、わかりやすいと好評であった。

